

復活節第3主日 (ヨハネ 21:1-19)

形だけでなく生き方も主の招きに応える



中田神父は 1966 年生まれですが、1966 年生まれの人の価値はどれくらいなのでしょう。ワインに例えてみました。ネットショップで 1966 年物のワインに付けられた値段は、2 万円とか 3 万円とか、ちょっと手が出せない値段でした。もちろんそれ以上の値段もあります。

日本では、人間国宝に認定された人がいます。人間国宝は、伝統的な芸能や工芸技術を極めた人が、国の認定を受けることで、認定された人はその技術を継承・発展させる役割を担います。不思議だなと思うのは、人間国宝に認定される人は若い人ではなく、お年を召された方です。

歳を取ると機敏な動作はできなくなるし、視力聴力、全般的に落ちてくるし、体力も衰えてきます。きっと若い人のほうが、機敏な動作ができるし、記憶や体力も充実しているでしょう。それでも、伝統的なものを極め、歳を重ねた人が人間国宝に認定されているわけです。

今週の福音で、イエスはペトロにこう言っています。「わたしの羊を飼いなさい。はっきり言うておく。あなたは、若いときは、自分で帯を締めて、行きたいところへ行っていた。しかし、年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへ連れて行かれる。」(21・18) これは何を言おうとしているのでしょうか。

「若いときは、自分で帯を締めて、行きたいところへ行っていた。」ペトロであっても、自分で何でもできると思ってしまい、勘違いすることもあったでしょう。けれども年をとってから、違う形で神の栄光を現すようになるのです。

ペトロにイエスが「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか」(21・16) と三度尋ねるわけですが、若いときに問いかけるのと、年をとってから問われるのでは明らかに違うと思います。ペトロが問いかけられたのは、目の前の三度だけでないかもしれません。

つまり、イエスと宣教活動に出かけていた頃、ペトロが使徒たちの頭として活躍していた頃、ローマで殉教する瞬間、それぞれの三つの場面にも思い出したのではないのでしょうか。ローマで殉教するとき、「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか」あのイエスの言葉がよみがえり、「主よ、あなたは何もかもご存じです」(21・17) ときっぱり答えたのだと思います。

それが、一つひとつの言葉の重みなのかも知れません。助任司祭の時代に、主任司祭の説教を何度も聞きに行って、「なんだ。あれくらい自分でも話せる」と思ったものです。しかし当時の主任司祭の年になってみて、「時間だけが過ぎたのではないか。何一つ近づけていないのではないか」と、愕然とするのです。

「年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへ連れて行かれる。」本当に、行きたくないところに連れて行かれることばかりです。それでも、イエスの十字架の意味を学ぶため

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

には本物の十字架を背負う必要があり、眠れない日があったり、痛みをこらえて日々の務めを果たす中で「これこそ、行きたくないところへ連れて来られたのだなあ」と実感するのです。

年齢によって、境遇によって、ささげるべきものが違います。それでも、1966年生まれの同世代の中で、イエス様から手に取って貰えるワインでありたいと思います。「わたしに従いなさい」(21・19)との言葉に、形だけでなく生き方も、応えていきたいものです。

復活節第4主日(ヨハネ 10:27-30)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。